

大学におけるキリスト教教育の可能性

深 谷 潤

A Study of Possibilities in Christian Education in Christian
Universities in Japan

Jun Fukaya

1. はじめに

19世紀初頭、プロイセン公教育局長であったフンボルト（1767～1835）がベルリン大学創設時に掲げた研究と教育は、近代的大学理念としてあまりに有名である。教育改革の激動の今日、日本の大学では、理念ばかりではなく、存立そのものが危機にさらされている。私立大学の約4割が定員に満たず、国立大学法人も予算削減への対応策に頭を悩ませている。キリスト教教育を行なう大学が、その特徴を活かす可能性、危機を乗り切る可能性を開いていくには、何が重要であろうか。この大きく重い問いを抱えつつ、これから「大学におけるキリスト教教育の可能性」についてその内容を「大学におけるキリスト教教育」と「キリスト教教育の可能性」の二つに分けて考察を進めて行きたい。

2. 大学におけるキリスト教教育

2.1 キリスト教教育の概念

明治初期に来日した宣教師たちの人格の中で伝道と教育は統合され、当時の日本人たちになされていったと考えられる。これはかつて論争となった宣教（ケリュグマ）と教育（ディダケー）の区別¹を明確化することに、あまり大きな意義を見出さないことを意味している。つまり、キリスト教教育は伝道や宣教とほぼ同義であった。当時のキリスト教の学校は、キリストの福音を伝える

使命（ミッション）をもち、教育活動を行っていた。本来、教会の仕事である宣教活動を、学校の教育を通して間接的に行なおうとした。その結果、宣教師たちの献身的な奉仕や活動は、当時の日本人に人格的に深い影響を与え、キリスト者になるものも少なくなかった。宣教師の活動が彼ら・彼女らの人格を通じて、日本人に理解され、信仰を育成したことは、教会と学校の共通点である。戦後も継続して、教会のもつ宣教的機能²がキリスト教学校の教育原理になっていることは、否定できない。しかし、今日、キリスト教教育は、多くの場合、学校においては「キリスト教学校教育」、教会では「教会教育」の用語が用いられている。

一般的に教育は、人間の活動として、人間が人間を教育することを意味している。ギリシア哲学に端を発し、人文主義思想を背景とした西洋の教育思想において、人間中心主義の教育概念は、今日いまだに大きな影響力をもっている。有名な『エミール』の冒頭の部分にある3人の教師の話は、人間と物を教師とする教育は、コントロールが可能であるが、自然は不可能であり、すべての教育は自然を教師とすべきであるという主張である。³ 自然をそのまま神と置き換えると神中心のキリスト教教育になるようにも思われるが、そう単純ではない。そこには、人間中心主義か神中心主義かという自律と他律の二元論では捉えきれないキリスト教教育独自の複雑な構造が潜んでいるからである。⁴ 教育は、その活動の視点から捉えると、自己と他者、学習者である自分と教師という人間の存在が前提とされる。あるいは、他者が人間ではなく自然的、社会的環境の場合もある。一般の教育の場合、他者が世界に存在する人、物、自然等であるが、キリスト教教育の場合、それらを含めつつ、さらにそれを超越する絶対的他者であり、創造主である神の存在を前提としている点が大きく異なる。例えば、教師は学習者にとっては、現実に教師でありつつ、真の意味での教師ではないという自覚が求められる。つまり、本当の教師は、キリストであるという自覚である。これが、先の神中心主義と異なるのは、最初から現実の教師を無視して、神を求めるのではなく、人間の営みの中に、人間のすばらしさと限界を経験し、それを通して神の働きを見出す2重構造を持っていることにある。人間の認識を信頼し、理性のみに存在基盤を置くのではなく、また、現実

世界から逃避し、超越的な絶対者のみを信仰するのではなく、世界の中に生きる存在としての自己を自覚し、その中で自己を超越した神への信頼を獲得することが今日より重要とされている。

戦後、アメリカのメソジスト教会が行なった日本のキリスト教伝道の調査・報告（ブランボー報告 1957 年）では、日本のキリスト教学校に対して、もっとキリスト者の教師を増やすことが勧告されている。⁵ かつてミッション・スクールでは、教師の大半がキリスト者であり、毎朝共に礼拝を守り、信仰に堅く立って子どもたちの教育にあたっていた。しかし、周知の通り、今日のキリスト教学校のほとんどが、キリスト者の教師の減少に頭を悩ませている。青山学院大学キリスト教文化研究センターのアンケート調査⁶（1992 年）によると、全国のキリスト教系大学・短大で回答のあったもの [61 校] のうち 4 校に 1 校で、キリスト者専任教員が 20% に満たない [14 校] 結果がでた。キリスト者が多数を占める（60% 以上）学校は、13.1% [8 校]、一番多かったのが専任教員の 3 割前後がキリスト者というものである。（34.4% [21 校]）現在はさらにキリスト者が減っていることが予想される。つまり、教会とは異なり、キリスト教教育を担う教師は、学校の中では少数派であることを踏まえておかねばならない。よく、「信仰をもつ・もたないに関係なく」キリスト教の行事に参加するよう求められるのは、このような現実が背景にあるからである。實際上、キリスト教信仰をもたない教員抜きに学校のキリスト教教育は実践不可能である。

2.2 キリスト教教育の大学における特徴

ここで、実際にキリスト教教育に具体的に触れるものとして、いくつか例を挙げたい。

教育目的に関する事柄：教育理念、建学の精神など。

例、「キリスト教精神に基づき(……)」

教育課程に関する事柄：キリスト教関連科目。例、キリスト教教学

：特別活動。例、学校礼拝（チャペルアワー他）、学校行事（入学式・卒業式、新入生オリエンテーション）、学内活動（クラブ活動、[聖歌隊、ハンドベル他]）、学外活動（ボランティア活動、ワークキャンプ他）

Faculty Development：教職員向けの様々なプログラム。例、ファカルティ・リトリートなど

この中で、学校礼拝については参加者が少ないことや強制的に出席させるべきか否か、礼拝の回数や時間帯など、これまで様々議論がある。後で改めて触れたい。注目すべきことは、活動の規模や人的労力・時間を比較的多くとる特別活動についてである。大学・短大では学外施設を用いた行事を行なっているところが少なくない。先の調査では、23の大学、21の短期大学でキャンプや研修会、セミナーなどキリスト教教育に関わる何らかの行事を行なっているという回答があった。興味深い点は、短大に比べて大学の方が参加希望者のみのところが多く、強制力が弱くなっている。中学・高校では、カリキュラムにおける教員の指導が可能なので、行事参加は実質的に義務化可能であるが、大学の場合は、参加を促す、というスタンスにならざるを得ないと考える教師も多いのではないか。この指導の在り方が、大学と他の教育機関との境目になると考えられる。

今日の大学は、かつてないほど大きな転換期に突入している。1992年を境に18歳人口は減少し、統計上、2007年には、入学定員と受験者数が同じとなる全入時代を迎える。しかし、地方の大学では、すでに倍率が1倍程度、定員割れの大学も少なくない。2002年に日本私立大学振興・共済事業団がまとめたデータによると、私立大学・短期大学の経営母体の学校法人の収支は、全体の約4割（短大では半分近く）が赤字であると言われている。⁷（大学461法人のうち109 短大189法人のうち85）まさに、「生き残り」をかけて闘っている状況であり、キリスト教大学も例外ではない。⁸ 都市部の大学や有名国立大

学も含め、大学の研究ばかりでなく、学生の満足度調査、授業改善、就職支援など教育の質の向上に努めている。

さて、大学に於けるキリスト教教育の特徴を「教師の指導の及ぶ範囲」と言う観点で捉えると、それは初等・中等教育と比べて狭く、学生の自主性に任せることが多いと言える。例えば、クリスマスの行事で、合唱や降誕劇などを行なう場合、小・中・高では、音楽などの時間を用いて児童生徒に指導が可能である。それは、カリキュラム上の強制力が働いていることを意味している。他にも、聖書の時間は単位化され、チャペルアワーも全員参加が原則である。学習指導や生活指導が教師の仕事の要であり、それは、キリスト教教育の領域においても基本的に適用される。しかし、大学には、そういった意味での指導はなく、むしろ、支援や援助、サポートなどあくまで教育活動は、学生主体であり、学校側は特にキリスト教教育に関しては強制しないスタンスをとっているところが多い。

さらに、学生ばかりではなく教職員の自主性に依存したキリスト教教育のプログラムは、その計画・準備・実行に際して、必然的に参加者が限定される傾向がある。例えば、新入生・新任教職員など、義務を自覚している期間にキリスト教教育のプログラムが設けられていることが少なくない。むしろ、課題とすべきは、プログラムの義務化を感じなくなった時点での、キリスト教教育へのかかわり方と言えよう。つまり、学生・教職員の主体性・自主性の育成が問題となる。

3. キリスト教教育の可能性

さて、「可能性」とは将来に向かって現在を分析する視点といえるが、この可能性について、これまで日本のキリスト教教育の研究者はどのように語ってきたのか、過去の視点から最初に説明していきたい。キリスト教教育に関する論文・研究書はおびただしい数があるが、大学を中心においたものは、キリスト教保育や教会教育と比較するとまだまだ少ない。その中の一部として、雨貝と古屋の研究を考察したい。⁹

3.1 大学の教育理念

雨貝と古屋の著書で共通するテーマとして、大学の教育理念があげられる。

雨貝は、著書『キリスト教教育の使命—大学教育とキリスト教—』のIV部「キリスト教大学における『キリスト教的なもの』とは何か」の中で、**キリスト教と大学の教育理念**について触れている。以下その内容をまとめた。

キリスト教と大学の本質は、キリスト教の知識が普遍的な学問体系として存在していたヨーロッパ中世時代には一致していた。徐々にキリスト教と学問の間には緊張と距離が生じてきた。今日、キリスト教は、大学において、学問の自由ばかりではなく、人間の自由であることを生かすための信仰として諸科学を基礎付けていると確信する。キリスト教を絶対的規範とし、キリスト教を批判することを許さないようなことであってはならず、絶えず自己批判しつつキリスト教を発展させ、市民社会に貢献する確信をもつこと、それがキリスト教が大学を設立していることの意味である。関西学院大学、青山学院大学、東北学院大学に共通する教育理念は、献身、奉仕の精神であり、それを実効させるのがキリスト教信仰である。

また、大学礼拝やキリスト教学などの科目の在り方についても触れているので、参考までに紹介する。

大学礼拝：實際上、大学礼拝は、学生たちに伝道するためにあり、キリスト教会と彼ら彼女らを結びつける役割をもつと考えられる。しかし、礼拝は、キリスト教の大学がその信仰を告白する表現である。祈りをすることによって、大学が大学でありつづけようとするのである。礼拝は、キリスト教に基づく共同体が、学問的研究と高等教育の活動に責任を担う証しである。それ故、礼拝堂（チャペル）は、入学式、講義、教授会、学生会、卒業式を初め、大学のすべての活動に開放される必要がある。礼拝は、学問を通して、神の業を探究した喜びに感謝を捧げる祝宴と解釈できる。それに

参加することを「強制」と印象づけることは、その参加者が成熟していない場合であろう。

キリスト教学等の科目：「キリスト教学」「キリスト教概論」は、単に、キリスト教の総括的な知識の習得に留まらず、キリスト教信仰が人間と世界（自然含む）に対する貢献をなしうることを示し、現実を根源的に問うことのできる視座を示すことを可能にさせることが目的である。キリスト教と諸学問との関わりを主題とし、その学問的営みが、大学の理念によって内的に連携すること、その具体的な学問的連携が「キリスト教学」と言う科目である。そのため、それは（神学を含め）専門学科のための基礎学や予備学の一つではなく、「普遍学」であり、学問的形成の基礎として必修とされなければならない。

両氏は、大学においてキリスト教は、学問の体系を基礎付けるものとして存在してきたし、またこれからもその役割の重要性は変わらないと考えている。次の古屋の『大学の神学』はさらにこの点を徹底している。その一部を以下に紹介する。

大学の神学とは、「大学の本質」を神学的に探究しようとする試みである。本書は、最初に現在の大学の危機的状况に触れ（1章）、プリンストン大学をはじめとするアメリカの大学の歴史（2章）、さらに現代の大学に於ける根本問題（3章）を挙げる。例えば、真理、道德教育、学問と価値、自由、哲学と神学などである。主テーマである、大学の神学は4章で展開されている。最後にキリスト教大学の状況と今後のあり方について述べている（5章）。特にここでは、4章を中心に説明する。（4章は9節までであるが6節以下は神学の議論になっているので割愛する）

1] 大学の理念形成

近代に於ける「大学の理念」論の最初は、ジョン・ヘンリー・ニューマン

によってなされたが（1852年）、それは、神学者による大学の理念論であり、大学の神学（Theology of University）ではなかった。彼は、神学が探求している「宗教的真理は一部であるだけでなく、一般的知識の条件である」。それがなければ大学教育のおりなす織物は、ばらばらにほどけてしまうであろう、といている。今日大学に必要とされているのは、ヤスパースの言うような「交わり」である。ユニベルシタスが本来教授、学生の共同体を意味していたように、学者同志の論争しつつも固く結ばれているような人間関係が喪失していることが指摘されている。その根底には、諸学問を統合するものが近代に無くなっているという根本的問題がある。その解決には、我々がどのような文化観をもつのかに大きく左右される。

2] 「文化総合（Kultursynthese）」構想（トレルチ）

トレルチは、宗教的価値が中心となり、文化を構成している諸価値の再活性化と統一化を企てた。それは、18世紀以来、キリスト教的、教會的文化が解体する中で、国家、社会、教会、家庭、学校をいかに新しく再編成するかと言う課題に取り組むことを意味した。

3] 神律的文化（ティリッヒ）

文化総合の発展概念として、ティリッヒの神律文化が想定されうる。ティリッヒは、「宗教は文化の実質（substance）であり、文化は宗教の形態（form）である。」と言う命題を提示し、そこから他律的文化、自律的文化、神律的文化の三類型を導出した。他律的文化の例として、中世のカトリック文化があり、自立的文化には、啓蒙主義が該当する。神律的文化（theonomous）とは、究極的な関心のゆえに自分の内面から自発的に行なおうとする自律を規準とした文化である。我々が形成に努力しなければならぬのは、この神律的な大学である。ただ自由な大学ではなく、真理（神）を探究する大学である。

4] 徹底的唯一神信仰の社会 (H.リチャード・ニーバー)

ニーバーは、西洋文化の信仰形態を、単一神主義、多神主義、徹底的唯一神主義 (Radical Monotheism) に分けた。徹底的唯一神主義は、一つの神ではなく、すべての価値の根源である神を信仰することによって、排他性や不寛容を克服する形態である。それに基づく大学は、必ずしもキリスト教大学とは限らず、国立大学でもなり得る。(例：矢内原忠雄が総長時代の東京大学)

5] 大学の神学的理念

「キリスト教大学は、宗教的プログラムをもっているのではない。その大学が宗教的プログラムなのである。」(ウィリアム・クラーク) これは、キリスト教大学にのみ当てはまるものであるが、本来、大学は研究と教授の特殊義務を果たすことにおいて、超越者に対して直接の責任をもっている。そのため、大学は、一つの文化の部分であるが、その文化の見解を超越することを試みずにはおれないものである。それが大学の神学的理念の特徴を示している。

古屋の議論の中でも、キリスト教は諸学問における知の統合としての役割をになっていることが示されている。西洋において、真理の探究がキリスト教的価値観と結びついてきた歴史があるので、キリスト教と諸学問の関係は両者の主張は納得できる。しかし、現代の日本社会において、そのような考えを基礎に、大学の本質を語ることは、現在の私立大学における学問研究の環境の中では、説得力があるとは言えない。「すぐれたキリスト教大学として」¹⁰ 科学研究費など、外部からの研究費獲得もまた、今日、重要な要素とされているからである。

3.2 可能性

K.バルト研究者の一人小川圭治は、「キリスト教大学の現状と将来への展望」と言う講演のなかで、1998年10月に出された大学審議会答申「21世紀の大学

像と今後の改革方策について「競争的環境の中で個性が輝く大学」に言及している。¹¹ 周知の通り、1991年に大学の設置基準が大綱化され、実際上の教育内容の設定が、各大学の自由裁量に任されることになり、特色ある学校づくりが可能となった。その結果、教養科目の多くが廃止され、選択科目が増え、教育そのものが「グローバル化 (globalization)」の傾向に進んだ。多様性の中で、「個性が輝く」には、その根底にある人間理解や精神の問題が問われなければならない、と小川は指摘している。¹²

彼の主張には、キリスト教教育の可能性としての二面性が含まれていると考えられる。それは、キリスト教教育を实践するキリスト教大学の存在の可能性と大学内でのキリスト教教育の存在意義である。

第一点のキリスト教大学の存在の可能性については、今日、極めて厳しい状況下にあるといえる。ごく一部の有名私立大学を除き、多くのキリスト教大学・短期大学は、先述のように経営状態が悪化し、大学の存立そのものが危うくなっている。全国で唯一キリスト教教育主事の資格を認定する聖和大学も、2008年4月をめどに関西学院大学と合併すると報道された。¹³ 大学の経営と教育の質の確保のバランスに苦慮する例は、枚挙にいとまがない。¹⁴

まさに「生き残り」をかけた競争の中に、全国の大学は置かれている。キリスト教教育そのものが、「個性」であり、「特色ある教育」と言えるが、それだけでは何もしたことはない。クラークの言葉にあるように「大学そのものがキリスト教教育である」とするならば、教育そのものがキリスト教教育となるような在り方が問われなければならない。

隅谷三喜男は、講演の中でキリスト教教育における「私とあなた」の世界の重要性について述べている。彼は、ブーバーの「我と汝」に触れつつ、「大学は知識を切り売り」し、「工場」と化して、「我とそれ」の関係となっている、と批判する。¹⁵ 本来学生と教師の共同体として出発した大学は、その人格的な交わりを喪失している。キリスト教教育の根底に「私とあなた」の世界が改めて存在しなければならない。この世界は、神の前で「私」と「あなた」は平等の関係にある。神と私のタテ軸を意識することによって、平等と言うヨコ

軸が見えてくる。隅谷の指摘する通り、ヨコ軸の根拠としてのタテ軸への意識を持つときに、キリスト教教育と教育に共通する人間関係の地平が開けると言える。土戸清は、大学における学生相談と人権教育の充実を唱えている¹⁶が、それもこのタテ・ヨコ軸の捉え方に沿っている。¹⁷

しかし、それだけでは、キリスト教の独自性である啓示部分が明確とはいえない。何故なら、タテ軸を規定する思想は、必ずしもキリスト教とは限らないからである。確かに、人権や自由・平等の概念がプロテスタントから生じたと指摘する学者も少なくない。(大木英夫他)しかし、隅谷の論拠となるブーバーの「我と汝」の世界は、ユダヤ教の神観から生まれている。ドイツの実存哲学者ヤスパーズは、「超越者」への信仰(「哲学的信仰」)を説く。つまり、タテ軸をキリスト教と最初から主張できる教会やキリスト教神学の立場は別として、世俗化し、大衆化した現代の日本のキリスト教大学にとって、キリスト教の必然性に対する返答は、論理的説明ではなく具体的経験を通して与えられることが重要である。

キリスト教大学において、なぜキリスト教なのかを公に示すことが可能な機会、大学礼拝であり、また礼拝形式をとった様々な学校行事(入学・卒業式等)である。大学教員・職員、そして学生は、礼拝の中で神の前に平等であり、共に祈りと感謝を捧げる位置に立つ。授業における教師と学生のタテの関係が礼拝においてヨコになるのである。大学礼拝をどこまで重要視しているかが、キリスト教大学の本質を測る尺度となる。多くの学生を集め、経営的に潤っている大学であっても、この観点から評価する場合、すでにキリスト教大学としての存在意義を失う可能性も十分にあり得ると言える。

第二点の大学内でのキリスト教教育の可能性について考察したい。キリスト教教育に責任をもつのは、一般的に学内のキリスト者と考えられている。確かに、キリスト教信仰を持たない者が、公的場で祈りを捧げることは抵抗が伴うであろう。それ故、キリスト教教育を充実させるには、キリスト者の絶対数を増やすことが重要と考えられている。

しかし、この考えは、平均3割程度のキリスト者しかいない全国のキリスト

教大学ではいずれ通用しなくなると言える。キリスト教教育は、実際に非キリスト者の協力なしには、その多様なプログラムを実行することは不可能である。キリスト教信仰をもち、教会生活を真面目に守っているキリスト者を大学の構成員に選出することは、今日極めて困難となっている。だからといって、「キリスト者条項」(C-code)を安易にはずし、キリスト者のいないキリスト教教育を突き進めて行くなれば、大学礼拝はほぼ確実に消滅し、キリスト教大学の本質は喪失する可能性が大きい。問題は、キリスト教信仰の有無や所属教会を問う前提にある。實際上、キリスト者であるか否かは、教会で受洗しているかどうかが大きな判断材料である。心情的にキリスト者でありたいと思っても、教会には属したくないと密かに思う教員もいるであろう。また、様々な事情があって教会から離れている者も少なくない。一般的に信仰共同体に属することがキリスト者の前提であると考えられている。これから大学においてキリスト教教育の可能性を探る場合、「信仰共同体」ばかりではなく、キリスト教学校における「教育共同体」として在り方を探る時期にきている。¹⁸

教育共同体は、教会と異なり伝道ではなく、教育を目的とするので、「教育」共同体といわれている。しかし、目的を付加するだけではなく、共同体の在り方を模索し、その特徴を明らかにしていかなければならない。

2004年のキリスト教学校教育同盟主催の講演で、元日本銀行総裁の速水優氏は、私立学校では、建学の理念をはっきりさせ、リベラル・アーツを作り上げる必要があること。そして、そのため職員がキリスト教主義を明確に頭に入れ、「学生が必ずしも在学中に信仰を身に付けなくてもキリストの香り(Something)を充分知って卒業させてやりたい」と言及した。¹⁹講演会の感想を読む限り、「キリストの香り」に共感した参加者は少なくないと思われる。「キリストの香り」を知ることは、卒業生ばかりでなく、キリスト教信仰をもたない教職員にも当てはまると考えられる。

ここで重要なのは、キリスト教の香りではなく、「キリスト」の香りと言う表現である。キリスト教とキリストを分けることは、具体的に、教義や教団などをもつ宗教としてのキリスト教と、2000年前のイスラエルで受難と復活をとげた大工の息子ナザレのイエスを区別することである。無論、両者は分離不

可能だが、イエス・キリストを源とし、キリスト教の歴史が発展してきた事実が基本的理解でなければならない。キリストを原点とすることの意味は、教育共同体を構成する際、極めて大きいと考える。何故なら、福音書には、イエスと弟子たちや民衆との交流が多く描かれ、そこからイエスの愛や厳しさなどを知ることができるからである。キリスト教は受け入れがたいが、イエスは好きだ、と言う人もいるであろう。教会にはいきたくないが、聖書は読みたい、と思っている人もいるであろう。そのような、「キリスト教シンパ層」²⁰（松村克己）がキリストの香りを漂わせる構成員となると考える。

4. おわりに

大学におけるキリスト教教育の可能性は、教育共同体の構成員を「キリスト教」中心ではなく「キリスト」中心に置くことによって、さらに広がっていくと考えられる。教会と学校の連携の在り方をさぐる試み²¹など、連携による問題解決も共同体形成の一つの方法ではある。教会抜きのキリスト教教育を主張することは、比喩的表現をするならば、親子関係を解消するに等しい。しかし、従来のような「教会の機能としてのキリスト教教育」を主張するだけでは、今日のキリスト教大学におけるキリスト教教育を導いていくには限界がある。教育共同体は、キリストを理解し、受け入れる構成員が増えることによって、成長・発展していくにちがいない。

- * 本稿は、2006年夏に西南学院で行なわれるキリスト教学校教育同盟主催の夏期学校（西南地区）において、発題する内容「大学におけるキリスト教教育の可能性」をまとめたものである。

<註>

-
- 1 C.H.ドットによるケリュグマとディダケーの区別は、キリスト教と教育の原理を二分するものとして、1960年代前後に国内で盛んに議論された。遠藤彰は、両者は根本において異質なものではない、と述べている。高崎毅・

- 太田俊雄監修『キリスト教教育講座2（キリスト教教育の原理）』新教出版社 1958年 p.128 cf.拙著「キリスト教に基づく教育に関する一考察」キリスト教教育論集第14号 日本キリスト教教育学会 2006年 pp.1-11
- 2 高崎毅「教会の機能としてのキリスト教教育」キリストのからだである教会が、その頭であるキリストの委託に応じてキリストの形が人間の中に成るために努力し、奉仕する。（ガラテヤ4:19）高崎毅・太田俊雄監修『キリスト教教育講座2（キリスト教教育の原理）』新教出版社 1958年 p.10
- 3 ルソー『エミール（上）』（今野一雄訳）岩波文庫 2004年 p.24
- 4 cf.小林公一「一般の教育とキリスト教教育」『キリスト教教育辞典』1969年 pp.15-23
- 5 Thoburn T. Brumbaugh: *Report on Our Christian Schools in Japan, Missions on Methodist Churches*, 1957
- 6 青山学院大学キリスト教文化研究センター編『現代におけるキリスト教教育の展望』ヨルダン社 1996年
- 7 朝日新聞教育取材班著『大学激動』朝日新聞社 2003年 p.125
- 8 全国のプロテスタント系キリスト教学校が加盟するキリスト教学校教育同盟の統計によると、学生、生徒、児童数は、1998年当時と比較すると、全体的に4,213人減少している。（2004年5月現在343,581人）特に短期大学の学生数が激減し、36,035人から17,310人とほぼ半分となった。
- 9 雨貝行麿『キリスト教教育の使命—大学教育とキリスト教—』ヨルダン社 1989年
 古屋安雄『大学の神学』ヨルダン社 1993年
 他にも『キリスト教大学の新しい挑戦』（倉松 功・近藤勝彦 聖学院大学出版会 1998年）や倉松功『私学としてのキリスト教大学』（聖学院大学出版会 2004年）、四国学院大学キリスト教教育研究所『大学とキリスト教教育』（新教出版社 2005年）がある。
- 10 倉松（2004）、p.185
- 11 四国学院（2005） p.62
- 12 Ibid., p.68

- 13 キリスト教学校教育 497号 2006年3月 キリスト教学校教育同盟
- 14 cf.山崎和明「地方のキリスト教主義大学の場合―愚かさとの戦い―」四国学院 2005年 pp.227-280
- 15 隅谷三喜男「キリスト教教育は<I and you>の世界の上に」四国学院 2005年 p.210, p.223
- 16 土戸清「変わりゆく大学におけるキリスト教教育の使命と課題」四国学院 2005年 p.165-
- 17 cf.山内一朗のキリスト教教育理論（山内一朗『神学とキリスト教教育』日本基督教団出版局 1973年）
- 18 松川成夫「『キリスト教に基づく教育』を考える」学校伝道研究会編『キリスト教学校の再建』聖学院大学出版会 1997年 pp.94-111
- 19 「キリスト教学校で共に働く」（第48回事務職員夏期学校 速水優「キリストの香りが漂う職場」2004年7月24-26日 御殿場東山荘）キリスト教学校教育 2004年9月号 キリスト教学校教育同盟
- 20 松村克己「宗教と教育―日本に於けるキリスト教主義学校に関する神学的考察―」神学研究 関西学院大学神学部 7巻 1958年 pp.373-402
- 21 cf.日本キリスト教教育学会大会フォーラム（2006年6月16日 東洋英和女学院大学にて）において「こどもの信仰教育と人間形成の関わりについて―教会とキリスト教学校の連携を図るため―」が行なわれた。